かっちん（へーばる）南風原資源マップ

勝連城跡からの見るかっちん南風原集落

勝連城跡

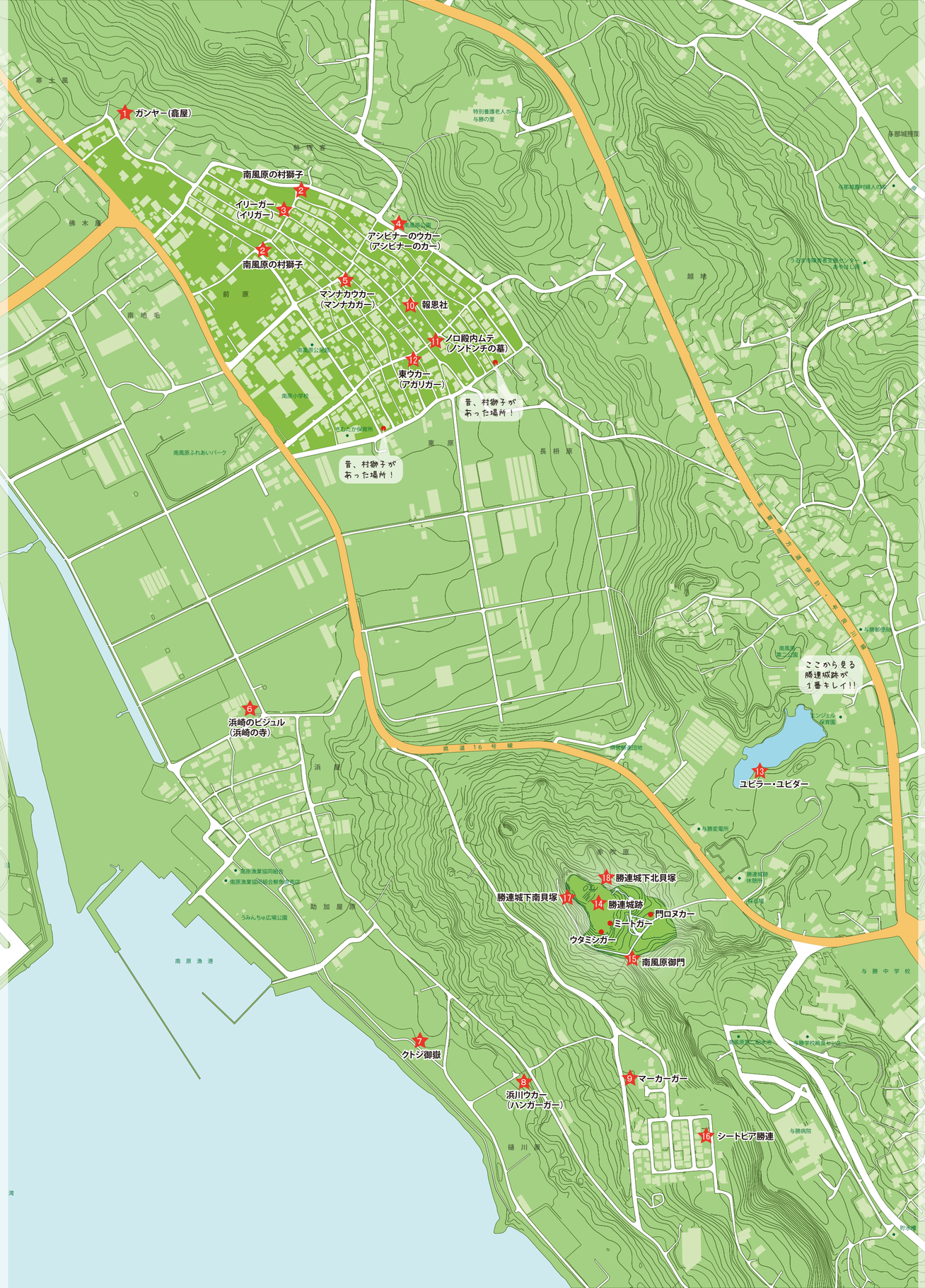
かっちん（へーばる）南風原の位置

かっちん（へーばる）南風原の発祥と名称

南風原部落の発祥は勝連城の南側傾斜地元島原に発祥したと伝えられている。
往古勝連村と称えられ、間切名勝連もこれに拠ったもので、所謂（いわゆる）勝連同村であった。
杜祿台帳に南風原のノロクモイは勝連ノロクモイとあり、南風原の地頭を勝連殿内と称えていたことなどから考えても、勝連がその古名であったことは間違いないと思われる。阿麻和利の時代に南風原と改称されたという口碑がある。

村の移動

雍正４年（１７２６年）、今から約２９０年前に現在の地に移動した。（近世地方経済資料１０巻に拠る―享保１２年薩摩から黒糖増の指令があったが、勝連間切南風原村はその前年歎賛をしたばかりであることを理由として盛増を差免されたとある。）
当時南風原村に前浜親雲上というすぐれた指導者がおり、その方の指導と努力によって、当時の首里王府から部落移動の許可をうけて現在の地に移動して南風原村を形成したと伝えられている。
南風原のムラづくりは道路網を基盤目型に整然とし、又共同井戸、用水地、防風林、防潮林も計画的で適当に配置され、２７１年前から都市計画が施行され、都市計画のおこりは南風原からはじまったと言っても過言ではないと勝連村誌は記述している。



1 ガンヤー（龕屋）

棺を墓まで運ぶ朱塗りの輿のことを一般に龕（ガン）といい、その輿を保管していた建物。

2 南風原の村獅子

さんご石灰岩加工して作った素朴な獅子像である。
南風原村が勝連城跡南側の元島より雍正４年（１７２６年）に移動した時、村の境界として、或いはフーチゲーン（邪気払）として東西南北の四角に置かれたと伝えられている。今では、北側と南側が残っているだけであるが、集落の研究や民俗資料として貴重なものであり、平成２年３月２６日勝連町文化財に指定された。

3 イリーガー（イリガー）

ニーヌハのウカーともいう。沿革は、東ウカー（アガリガー）と同じ。
共同井戸でンブガーともいう。
現在は使用されていない。旧２月、８月に村御願を行う。

4 アシビナーのウカー（アシビナーのカー）

昔、子年と午年に村アシビが行われる習慣があって、この行事が無事挙行されることを祈願してつくられた。
現在は使用されていない。
旧２月、８月に村御願を行う。

5 マンナカウカー（マンナカガー）

沿革は、東ウカー（アガリガー）と同じ。共同井戸でンブガーともいう。
現在は使用されていない。旧２月、８月に村御願を行う。

6 浜崎のビジュル（浜崎の寺）

このビジュルは、向かって右側はなシー（イナグシー）、左側は男シー（イキガシー）で、南風原ノロ殿内とのつなぎがあるといわれている。なお、拝むときは、お香には火をつけずに右なシーを先に拝むこと。
このビジュルを拝むと、子宝に恵まれる、海外移民の健康祈願になると伝えられ、又、普天間権現とのつなぎがあって、このビジュルから普天間権現へのお通しもできる。
旧２月、８月の１０日以内に村御願を行う。

7 クトジ御嶽

琉球国由来記に勝連間切の拝所として南風原村の項にコト瀬嶽神名マネヅカサノ嶽イベと記されている。２ｍ位の高さ大岩の前にコンクリートの小祠が作られ、ウスクと雑木林に囲まれた静かな森になっている。旅果報、航海安全を願う拝所である。
昔、唐（中国）から来たなが、クトジ御嶽の洞穴で子供を出産し、浜崎の寺（ビジュルー）で命名したと伝えられている。
その為クトジ御嶽は男禁制の拝所であり、男が拝みに行くときは、女装（ウシンチー）して拝んだとのことである。

8 浜川ウカー（ハンガーガー）

勝連按司系、第一世浜川按司の娘真鍋樽（マナンダルー）は絶世の美人で同人の黒髪は身長の1.5倍もあって、その頭髪を洗髪したことで有名である。
南風原村の元島時代のンブガーであった。
毎年旧正月元旦は、南風原及び近隣部落の門中によって「カーウビー拝み」が行われている。
旧２月、８月に村御願を行う。

9 マーカーガー

神人（カミンチュ）が生まれた時のヌールガーである。
ウマチー（お祭）、神拝みのときは、神人はこのカーで手足を清めて城内（グヌクウチ）に登った。
南風原村の元島時代のンブガーであった。旧２月、８月に村御願を行う。

10 報恩社

前浜親雲上地頭代を祭る、前浜三良、勝連パーマーともいう。
南風原ムラを勝連城南下元島から、現在地に移動するにつき、内外ともに心を砕き、旦屋敷、道路、用水地（クムイ）共同井戸等村づくりに貢献した大恩人である。
毎年旧正月元旦に初御願を行う。
旧２月、８月に村御願を行う。

11 ノロ殿内ムテ（ノンドンチの墓）

根神へのお通しをする。旧２月、８月の１０日以内に村御願（お通し）を行う。

12 東ウカー（アガリガー）

共同井戸で、ンブガーである。
旧藩時代は、公儀（クージ）の許可がなければ個人用の井戸は掘れなかった。
よって村内の要所二ヶ所に共同井戸がつくられた。ンブガーともいう。現在は使用されていない。旧２月、８月に村御願を行う。

13 ユビラー・ユビダー

水田のなかでとくに年中水が停滞しているため、農作業のとき、体が深くまで入りこむような湿田。下層には泥炭や黒泥などがあり、水田として利用される以前は泥沢地であったと考えられる。沖縄では、伊平屋村田名の水田地帯や名護市の羽地ターブックワが知られる。

14 勝連城跡

城は南風原集落の南東方に突出する丘陵上にあり、最高部の一の曲輪（標高９８ｍ）からは東海岸一帯や海中道路を眺望することができるなど、県内屈指の景勝地の一つである。
城壁は自然地形を巧みに利用しながら石灰岩を積み上げ、城内は５つの曲輪からなっている。
勝連城は歴代の城主が海外交易を活発に行い栄えたが、特に１０代目城主「阿麻和利」の時代には栄華を極め、勝連に大きな富と名声と文化をもたらしたと言われている。
１９７２年に国指定史跡として指定されると、史跡整備に向けての遺構調査や、城壁建物跡などの復元整備が実施され、その後２０００年に世界文化遺産に登録された。
世界遺産登録後は年間約１２万人余の観光客が訪れるなど、本市ならびに沖縄県の一大観光拠点となっている。

15 南風原御門

本来の正門は南風原御門であり、城の南面から石畳を敷いた長い急坂を登ると、櫓（やぐら）を乗せた石造りの拱門（アーチ形の門）である南風原御門があった。

16 シートピア勝連

高台に位置し、きれいな海が見える住宅地。勝連城跡環境保全地区内であり、建物は景観に配慮されている。

17 勝連城下南貝塚

１９６４年に嵩元政秀氏により発見された貝塚である。勝連城の南側城壁外の斜面地に形成されている。グスク土器を主体に陶磁器類、古瓦が多く出土している。

18 勝連城下北貝塚

勝連城跡の北側城壁下の貝塚である。この曲輪から投棄されたものが堆積して遺物包含層を形成したものと理解されている。当包含層では、本れより出土する貨幣、玉類が出土している。また本貝塚は本れその他と比較して明時代の染付が多くみられ、また明時代の赤絵が出土しているという。